

* ロンビックアンテナの碍子

アーカイブ室新聞 115号にロンビックアンテナについて記事を書いた。その際、残骸の中に興味深い「碍子」(写真1)が野原に放置されたまま転がっていたおり、数十年の年月を経てもその姿、機能を保っていたと書いた。



写真1 ロンビックアンテナの残骸の碍子

この碍子がなかなか面白い。部屋に持ち帰りこねくり回しているうちに分解してみたくなり、工場に持ち込んで、道具を借りて分解(写真2)してみた。



写真2 分解したロンビックアンテナの碍子

これは碍子であるから、絶縁のための道具である。絶縁物としては陶器が用いられている。これは写真 2 のように白い両側が膨らんだ犬が啜えて喜ぶ「骨」のようである。そしてこの膨らんだ部分を「皮」で包んで二つに割れる鋳物で包み、リングから抜けないようにして自在に動くようになっている（写真 3）。



写真 3 二つに割れる鋳物のなかの両端の陶器の丸い部分

二つに割れる鋳物は碍子の先端部はケーブルをつなぐシャックルが入り、ボルトで締められるようになっており、内側の直径が小さくなったストレート部分にはリングがはまり、セットビスで固定されるようになっている。このリングは先端の丸い部分を通過できる大きさになっている。そして碍子の陶器部分が鋳物の引っ張られる方向の金属に直接当たらないように皮で半分が包まれるようになっている。この工夫でアンテナのケーブルが風邪で揺られても、陶器の部分が金属と当たって傷つかないようにしているようだ。このような工夫に感じ入っている。これも先人の知恵であろう。



左の写真 4 は、アンテナの残骸で作った「つるべ拾い用イカリ」と碍子単体の全体像である。